

子どもの発達に応じた音楽指導に関する一考察

松 本 晴 子

1. はじめに

平成18年10月、就学前の教育・保育のニーズに対応する新たな選択肢として「認定こども園」制度がスタートした。また、中央教育審議会では幼保一元化、幼稚園の義務化などについての議論が盛んに行われている。今後このことに対する結論が提示され、制度的に保育や幼稚園教育が一層充実されていくにしても、子どもたちにとっては、家庭を離れて生活する場としての保育所や幼稚園であることには変わりがないといえよう。

保育や幼児教育に求められているのは、家庭から離れて時間を過ごすことが多くなっていく現代の子どもたちに、家庭が持っている健全性、快適性、安定性に代わりうる生育に有益な環境を整えることと考える。そのひとつとして、音楽の持つ力と可能性に注目したい。子どもの生育にとって、音楽はどういう意味において有益な存在となりうるのか。音楽は子どもの成長にどのような役割を果たしうるのか。その音楽の可能性のために、保育士や幼稚園教諭を目指す学生は、大学教育の中で音楽の何を学び、何を体験し、何を身に付けていくことが必要とされるのか。

本稿では、保育や幼児教育の指導にかかわろうとする者にとっての音楽の持つ意味と意義について若干の考察を行うものである。

2. 人間が最初に音楽に出会うのは

人間が最初に音楽と出会うのはいつなのだろうか。人間の耳や聴覚器の発達からみると、大体妊娠一週頃に聴覚器の原形ができ14週には鼓膜が、18週位になると音を聞くことができるようになるといわれている。妊娠中期になると聴神経が形成され、28週になると音楽に対する反応がでてくる。そして生まれてくる頃には、聴覚の神経系は十分に発達し、脳幹聴力反応検査によれば成人並に発達している¹⁾。しかし、胎児の音楽に対する反応は、母親が音楽を聴いて心身に影響を受けることが要因となって引き起こされる反応という可能性も考えられ、胎児自身の反応であると断定できるかどうかについては、現在でも依然として確証がもたれていない。そのため、胎児と音楽の研究は信頼性に問題がある²⁾との批判がある。

乳児については、乳児の音や音声についてのコミュニケーションの視点からの研究は志村(2005)³⁾などによって行われているものの、乳児と音楽についての研究は少ない。そこで、本稿では「語りかけ育児」をすることが聞く力を育てるには重要であることを示唆しているサリー・ウォードの研究⁴⁾から、子どもの発達と音楽の出会いとの関係について考察していくこととする。

乳児は、生誕3ヶ月から6ヶ月で、家族の声、鍵をあける音など、日常生活でよく聞く

音の意味がわかるようになる。母親などから歌を歌ってもらいと大喜びし、音楽的な音にじっと耳を傾けるようになる。9ヶ月くらいになると、「ピン」と「ピン」のようなひとつの音の違いで意味が変わってくる語音の最小単位といわれる音素も聞き分けられるようになり、聞き分ける能力が完成する。その頃になると初語（初めての意味あることば）が出現する。耳から得る音が意味を持ち始め、どの音がどこから聞こえるのかということに興味をもつようになる。

この聞き分ける能力の発達によって、動き回ったり探索したりし、ただ見回すだけでなく音源を確かめにいくことができるようになる。音を選択的に聞く力とは、まわりのすべての音の中から聞きたくない音は無視し、聞きたい音だけを選び出して注意を向ける力、すなわち音に集中する力である。この音に集中する力は、実は自然に身につくものではなく、この1歳前の時期に、短い時間ながら選んだ音に耳を傾けたり、時間をかけてまわりの音を探したりということを繰り返すことによって、以前聞いたことのある音と比べながら、音を意味づけするための知識がたくわえられて、備わっていくものである。もしこの時期に、まわりの音の中から聞きたい音を選んで聞く力がうまく育っていないと、知っている音のレパートリーが少ないために、音を聞いても何の音かがわからず聞こうとしなくなる。選んで聞く力、選択的に聞く力が身につくためには、聞きたい音とまわりの音の間に大きな音量差がある静かな環境ということが重要である。

サリー・ウォードは、9ヶ月児に聞く力の調査を行い、音を聞いても何の音かがわからないために音の意味を見出せず聞こうとしなくなってしまったこどもや、大きい音や聞きなれない音でもまったく無視してしまった子どもなど20%のこどもに重い“聞き取り困難”が認められたこと、保育園や幼稚園、小学校などの教師の多くは、音を選んで聞く、選択的に聞くという力がうまく育っていないこどもの数が増え続けてきていることが学習障害の基盤になっているのではないかと考えるようになってきている⁵⁾ ことなどを報告している。要するに自分が聞きたい音を選択する力、注意を向けて聞く力、音に集中する力はすべての学習の基礎となる力であり、この力が未発達のうちは、音楽を音楽として聴いている、あるいは音楽心で受け止め感情が動かされるという段階までには達していないといえるだろう。

1歳から2歳児にかけては、言葉を覚える大切な時期である。状況や動作に合わせたおもしろい音、例えば飛行機の「ブーン、ブーン」や階段を上りながらの「ドスン、ドスン」「たかい、たかい」など、常に動作と合わせて声を出したり、またこどもが発した音と同じ音を大人がオウム返しに言ったり、服を脱がせるときに「くつしたぬいで、おぼうしぬいで、てぶくろとった」など、リズム感のあることばを繰り返し使ったり、さらには、手遊び歌などで遊んだりすることによって、音、音楽を聞くことが楽しく面白いことに気付いていく。そして、この頃から音楽に合わせて踊るようなしぐさもできるようになる。

2歳児を過ぎると、単語の数は200語ぐらいになりさらに急速に語彙が増え、一つ一つのことばがどのカテゴリーにあてはまるのかということもわかってくるので、この時期の子どもには、繰り返しのあるわらべうたなどが有益であるといえよう。また、語りかけ育児のなかで育っているこどもは、まわりが静かであれば、聞こうとする音だけを選んで聞く能力が十分に働くようになる。まわりの音がどこから出ているか、何の音なのかもよくわか

る。したがって、聞いたことのない音に出会ったときに「何の音なの？」と質問ができるようになる。また聞こえてくる音がうるさくて嫌な時は、大人にそう伝えることもできるようになる。

3歳児前後になると、ゆれてひっくりかえった物を見て、「あれれれ、ひっくりかえった」など、客観的な事実に対して、他人と同じ注意を向けるということができるようになる。このことが、後々、他人とのコミュニケーションを取り、社会生活への参加のしかたを学ぶ上で最も重要な準備になっているのである。この年齢で他人と同じものに注意を向けられるかどうかによって、4,5児歳以後、他人の考えや感情をわかるようになるかどうか、心のふれあいができるかどうかが決まると言われている。同じものに注意を向けられるようになると、自分の名前などが入った替え歌をうたってもらいと喜ぶ。また、この頃から、音楽の好みもはっきりしてきて好きな曲は繰返し歌ったり、音楽にあわせて動いたりすることが楽しいと思うようになる⁶⁾。

このようにみえてくると、子どもにとって、聞く力のもとになっているのは言語の発達であること、その発達をうながすのは大人の語りかけであること、これらが一体となってコミュニケーション能力を育てることになり、心の成長、感情の成長につながるという発達過程が明らかである。ウォードは、聞く力を育てるのに適切な状態は、テレビの音や雑音などのない静かな環境であることを繰返し述べている。これはいわゆる教育的な内容のテレビやビデオをみせておけば安心というような風潮に警鐘をならしているといえるだろう。子どもは、テレビやラジオ、CDなどの音のない時間、静かな時間を、出来るだけ多く設定することによって、音に対して敏感になり、聞く力が確実に育っていく。

したがって子どもと音楽との出会いは、子どもが音楽を聞いて何かを感じることができるようになったその時といえよう。この出会いは、一般的に何歳と決定づけられるものではなく一人一人異なるものであることは言うまでもない。

3. 子どもにとって音楽はどんな意味をもつのか

次に、音楽は子どもの成長にかかわる保育園や幼稚園の生活においてどんな意味をもつのかについて探っていきたい。このことを考察する前に、音楽が人間にとってどのような意味において大切なものであるのか、また音楽が如何に強く心身に影響を与えるものであるかを指摘している代表的な例をいくつかみてみることにする。

- (1) 『旧約聖書』「サムエル記」⁷⁾：心の病に（うつ病）に悩んだユダヤの王サウルの病床で、豎琴のうまい少年ダビデがサウル王の心を慰める曲を弾いたところ、サウル王はその琴の音色を聴き元気を取り戻した。
- (2) 『論語』「陽貨篇十一章」⁸⁾：音楽で大切なのは鐘や太鼓などの楽器を扱うことではなく、音楽によって人々の心が和まされるということである。
- (3) 『論語』「述而篇十三章」⁹⁾：齊の国に数ヶ月滞在している間、韶という楽器の音色の美しさに心を奪われ感動し、美味しいごちそうを食べるのも忘れてしまった。

(1) は、音楽によって病んでいた心が癒されて活力を取り戻した例であり、(2) は音楽の本質は、演奏技術が向上することよりも、音楽によって心が和むことが大切であることを示している。(3) は美しい音楽、真に美的な音楽は寝食をも忘れさせるくらい魂に働きかけるものであることを述べている。これらは一例であるが、このように古今東西を問わず、古代から音楽には心身に強く働きかける力があることが認識されていたことは明らかである。「音楽の父」と称される J.S. バッハも、「音楽は人間の精神の再構造のために有用なものであるとはっきり言っている」^[10] ことから、作曲活動にあたっては音楽を、神の恩寵への感謝を表わすという宗教的な配慮と同時に、人間の精神を浄化するものと位置づけていたことが考えられる。

このように音楽は、本来日常の生活や心身の健康にとって、一番身近にあるもので、言葉以上に人間の心身に語りかけて感情を動かしたり、癒してくれたり、役立つものであったということが推測できる。しかし、残念ながら日本においては長い間この考え方を受け入れる土壌は育ってこなかった。このことについて村井(1998) は、「音楽を病んでいる人のためや心身の健康のために影響を与えるものとして利用することについてはなかなか認められず、音楽は美を求める芸術であり、治療のために用いるのはおかしいという考え方が芸術音楽家たちの間に多かった」^[11] と述べている。

さて、子どもの成長にとって音楽はどう捉えられているかについて、厚生労働省が発表している「保育所保育指針の第一章 1. 保育の原理(1) 保育の目標」から検討してみたい。

「子どもは豊かに伸びていく可能性をそのうちに秘めている。その子どもが、現在を最もよく生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培うことが保育の目標である。」^[12]

上記に示されている保育の目標の中では、「現在を最もよく生き」という箇所に音楽は直接にかかわると筆者は考える。音楽に触れること、歌うことは、子どもに生きる喜びの源となる楽しさや明るい気持ち、あるいは、穏やかな気持ちを与える存在となること、子どもにとっての音楽は、現在を最も充実させ、よりよく生きることにつながるひとつの手段となりうるといえよう。

この保育の目標を達成するために、アからカまで6つの諸事項が示してあるが、このなかでは、以下の3つが音楽にかかわるものと考えたい。

ア 十分に養護の行き届いた環境の下に、くつろいだ雰囲気の中でこどもの様々な欲求を適切に満たし、生命の保持及び情緒の安定を図ること。

イ 健康、安全など生活に必要な基本的な習慣や態度を養い、心身の健康の基礎を培うこと。

カ 様々な体験を通して、豊かな感性を育て、創造性の芽生えを培うこと。

この3つの諸事項に音楽がどのようにかかわるのかについては、前述の音楽と心身とのかかわりと、「生活から生まれた音楽、生活と切り離すことの出来ないものとしての音楽」^[13] という視点が考えられる。音楽は特別なものではなく、生活のすぐそばにある、すべての子どもたちの個々の生活、成長にかかわる身近なものということである。

ただ、ここでの生活の捉えかたについては、注意が必要であろう。かこ（1981）は、「ひとところ幼稚園の運動会などで、ピンクレディーの歌と踊りが流行し、「これこそ音楽の生活化だ」と感激した人がいたが、もっと違った発想ととりあげ方があるはず」¹⁴⁾と苦言を呈している。このことは、ピンクレディーのヒット曲はこどもの喜ぶ音楽とは認めるけれども、運動会という行事で取り上げる音楽としてはたしてふさわしいのかどうかという問題と、そもそも幼稚園や保育園で取り上げるのにふさわしいといえるのかどうかという2つの問題を提起していると考えられる。確かに、ヒット曲やアニメの音楽は、子どもが生活の中で聞き覚えたもので、生活に密着しており、しかも大好きである。手遊びにもキャラクターものといわれる遊びがあり人気がある。だからと言って、これが音楽の主流になってよいのだろうか。そうした音楽は子どもにとって真に生活に密着したものなのだろうか。これらを見極めながら、子どもにとっての音楽の生活化をどうとらえることがもっとも適切なのかについて明らかにしていくことが、幼児保育の現場における重要な課題のひとつといえよう。

次に、諸事項のカ、「豊かな感性を育てる」という箇所からは、音楽が単に娯楽としてではなく、また生活を取り巻く飾りや「添え物」として取捨選択できるようなものではなく¹⁵⁾、音楽にかかわる活動を通して、感情が動かされること、感動することを体験することと読み取ることができるであろう。しかし、音楽美の感受、感得までを目標としているわけではないことは留意しておかなければならない。園部（1977）は、幼児と音楽との触れあいや結びつきの関係は、高度な精神作用と関連したものではなく、もっと生々しい感覚や感情の瞬間的で直感的な、ときには爆発的なものであること、きわめて素朴で原始的で本能的なものであり、情操という言葉よりは、子どもの本能が喜びや悲しみ怒りなどを揺り動かすという子どもの心理的作用、あるいは情動の方がふさわしいのではないかと¹⁶⁾ということを描している。このようにみてくると、子どもにとっての音楽は、感情の開放にかかわるもっとも素朴な表現であり、心理的作用であるといえるのではなかろうか。

次に、子どもの発達段階に応じて、音楽の表現はどのように示されているのかについて、かかわる部分を詳細にみることとする（表3.1）。

なお、第3章 六か月未満児の保育の内容には、音楽に関するねらいや内容、配慮事項が記されていないので省くこととした。

表3.1 『保育所保育指針』にみる音楽にかかわる保育の内容の記述

章	年 齢	ねらい	内容	配慮事項
4章	6か月から1歳3か月未満児		(15) 保育士の歌を楽しんで聞いたり、歌やリズムに合わせて手足や体を動かして楽しむ。	(14) 保育士の優しい歌声や、快い音楽を聴く機会を豊富にし、また、好きな歌や音楽は繰り返すようにして、満足感を味わえるようにする。さらに、大人の動作を見て模倣をする喜びを味わえるようにする。
5章	1歳3か月から2歳未満児	(11) 身近な音楽に親しみ、それに合わせた体の動きを楽しむ。	(18) 保育士と一緒に歌ったり簡単な手遊びをしたり、また、体を動かしたりして遊ぶ。	(11) 全身を使うような遊びや手や指を使う遊びでは、子どもの自発的な活動を大切にしながら、時には保育士がやってみせるなど保育士と一緒に楽しんで遊べるようにする。
6章	2歳児	(10) 保育士と一緒に人や動物などの模倣をしたり、経験したことを思い浮かべたりして、ごっこあそびを楽しむ。	(17) 保育士と一緒に歌ったり簡単な手遊びをしたり、リズムに合わせて、体を動かしたりして遊ぶ。	(13) 歌うことや、音楽に合わせて体を動かすことを好むので、子どもの好む歌、簡単な歌詞、旋律の歌や曲を正しく、美しく表現するように配慮する。
7章	3歳児	(14) 感じたことや思ったことを描いたり、歌ったり、体を動かしたりして、自由に表現しようとする。	「表現」(2) 音楽に親しみ、聞いたり、歌ったり、体を動かしたり、簡単なリズム楽器を鳴らしたりして楽しむ。	「表現」(2) 一人一人の子どもの興味や自発性を大切にし、自分から表現しようとする気持ちが育つように配慮する。
8章	4歳児	(16) 感じたことや思ったこと、想像したことなどを様々な方法で自由に表現する。	「表現」(2) 友達と一緒に音楽を聴いたり、歌ったり、体を動かしたり、楽器を鳴らしたりして楽しむ。	表現 (2) 子ども同士の模倣や認めあいを大切にしながら、表現する意欲や創造性を育てるように配慮する。
9章	5歳児	(15) 感じたことや思ったこと、想像したことなどを自由に工夫して、表現する。	「表現」(2) 音楽に親しみ、みんなと一緒に聴いたり、歌ったり、踊ったり、楽器を弾いたりして、音色の美しさやリズムの楽しさを味わう。	「表現」(1) 表現しようとする意欲を高め、結果にとらわれず、一人一人の子どもの創意工夫を認め、創造的な喜びが味わえるように配慮する。(2) 子どもの考えや子ども同士の認め合いを大切にし、みんなで一緒に表現することの喜びを味わうことができるように配慮する。(3) 表現しようとする気持ちを大切にし、生活や経験と遊離した特定の技能の修得に偏らないように配慮する。
10章	6歳児	(17) 感じたことや思ったこと、想像したことなどを、様々な方法で工夫して自由に表現する。	「表現」(2) 音楽に親しみ、みんなと一緒に聴いたり、歌ったり、踊ったり、楽器を弾いたりして、音色やリズムの楽しさを味わう。(6) 感じたこと、想像したことを、言葉や体、音楽、造形などで自由な方法で、様々な表現を楽しむ。(7) 自分や友達の表現したものを互いに聞かせ合ったり、見せ合ったりして楽しむ。	「表現」(1) 表現しようと思うもののイメージが豊かに湧くような雰囲気をつくり、様々な材料や用具を適切につかえるようにしながら、表現する喜びを味わえるように配慮する。(2) 子ども同士と一緒に活動する場合は、お互いに相手の立場を認め合いながら、協力し合って表現することの喜びを感じることができるよう配慮する。(3) 表現しようとする気持ちを大切にし、生活や経験、能力と遊離した特定の技能の修得に偏らないように配慮する。

全体としては、2歳児までと3歳児以上では、ねらい、配慮事項が大きく異なることが読み取れるが、本稿では子どもの発達にそって検討してみたい。

2歳児までは、子どもと大人の関係が大切に扱われており、保育士のかかわりや役目は直接的なものである。音楽の取り扱いは、歌やリズムに合わせて体を動かして遊ぶことがねらいとされ、体の発達との関係が密接なものとなっている。保育士の“歌を聞かせること”と“一緒に歌ったり手遊びをしたりすること”に加えて、1歳3か月未満児に“快い音楽を聴く機会を豊富にすること”が配慮事項として示されているのが特徴である。音楽は遊びのひとつであり、いつも傍らにあるものであることを示していると考えられる。

3歳児からは、こども自身の自発性に目が向けられ発達を促すことに視点が移る。4歳児以上になると、“友達と一緒に”、“みんなと一緒に”、ということが大切に扱われている。音楽は多人数とのコミュニケーションを養うためのひとつと位置づけられているのが明らかである。一人一人の自発性や創意工夫を配慮しながらも、最終的には、「一緒に」、「あわせる」ということが強調されている。すなわち、「一緒に」というねらいの根底には、「あわせる」喜びを体験するということと、自分たちの歌などを聞き合うという力が多少求められていると考えられる。しかし、この聞き合うという力は、全体の調和を考えて、自分を抑制したり、時には自分を押し殺したりすることも必要となるもので、4歳児の子どもにとっては、難しい活動である。むしろ生涯にわたっての音楽という長いスパンでとらえるならば、自分にとっての美しい音楽、快い音楽への目覚めや気づき、あるいは感情の発散こそが、この時期には大切にされるべき視点と考える。

ところで、前述したように子どもにとっての音楽は、感情の開放にかかわるもっとも素朴な表現活動であり、心理的作用であるということが推察されることから、音楽の機能について若干触れておきたい。音楽の機能の研究は、音楽人類学研究のメリアム(1980)¹⁶⁾をはじめいくつかの先行研究があるが、ここでは、音楽療法の視点から述べたい。これは、前述の『聖書』や『論語』などの古代の人と音楽と人間のかかわりでも明らかなように、音楽は人間の心身に強く影響を与えるという音楽療法の視点が子どもにとっても大切であるととらえるからである。

音楽療法においては、音楽の機能を生理的、心理的、社会的の3つにとらえている。生理的機能とは、音楽そのもの、あるいは音楽活動が直接身体に作用することを医学的に検証するものである。社会的機能とは、音楽が非言語的コミュニケーションとしての特徴をもっていることから、言葉ではコミュニケーションが取りにくい場合でも、音楽活動を通じて意志が通じ合うことに重点を置くものである。この社会的機能は、病気や障害を持っている人たちを対象とする音楽療法にとどまらず、音楽教育や会社など組織において、そして保育所保育指針でも重要視されているといえよう。心理的機能とは、音楽は心に直接作用し感情を動かすものであること、音楽によって心が動かされることが心身の健康のために役立つ働きをするというものである。

保育においても、この心身の健康のために音楽は大切な役割をもつという視点は、持ち続けるべき必要なことといえるのではないだろうか。心身の健康ということばには、心、感情が動かされる、感動するということの他に、園部のいうところの“感情の爆発”という感情の発散の要素も含まれる。

これらをふまえ、発達段階を考慮しながら、こどもにとっての音楽の機能を生かした実践をしていくことが求められるといえよう。

4. 幼児保育の音楽指導に大切なこと

このように子どもにとって音楽は、心身の健康のためにも大切な役割であることが明らかになったが、音楽指導にあたって大切なこととしては、次の2つをあげることができるだろう。1つは何をもって音楽に触れていくのかといういわゆる教材である。そして、もうひとつは指導者に求められる指導技術、あるいは指導方法といえよう。この両者は、両輪のようなものと考ええる。

子どもにとっての教材の条件として、丸山（1987）は次の6つをあげている¹⁷⁾。

＜子どもにふさわしい教材＞

- ①出の音が気持ちよくひびく歌
- ②音程のリズミカルな飛躍があること
- ③転調のあるもの、途中からリズムが変わるもの
- ④「お話」のある歌、子ども自身が発見し創っていくイメージをもたせるもの
- ⑤本質的に人間を大切に、子どもを明るい方向へ開いていく歌
- ⑥ドラマ性のある音楽、内面の流れを結晶させて異質なものと葛藤し価値観を変えるもの

これは、丸山自身が群馬県や埼玉県にある数ヶ所の保育園で実践を積み重ねた経験のなかから得た教材観である。このことを裏付ける出来事について、丸山は次のように述べている。

「子どもがその教材を好きになって、ほんとうにつくり出したい気持ちでうたったとき、（ピアノ 2点へ）これはファの音ですね、これはその上のソの音（ピアノ 2点ソ）ですね。その高い音でも子どもたちはきれいにし出してくるということ、…」¹⁸⁾

「乳児でも幼児でも、ほんとうに自分を気持ちよくさせてくれる歌やお話には目をかがやかせ、からだをのり出してくる。そうでないものにははっきりとそっぽを向いてしまう。無理に教えこもうとすればいやがって泣いたり、三歳児くらいになると、もっとおもしろいことをほかに見つけて逃げてしまう」¹⁹⁾

「＜うた＞そのものが新鮮で魅力があれば、子どもはかならず最初から集中し、同時に内部行動を開始する。子どものなかにイメージがつくられ、お話が生まれてくる。子どもたちは、新しい歌をおぼえながら、何かを創りはじめるのだ…」²⁰⁾

これらのことは、子どもだから高い音は歌えないと決め付けてしまうのは大人の判断であり、子どもは自分が好きになった教材であれば、音が高くても苦しそうで思える曲でもなんなく歌ってしまうということ、歌そのものが新鮮で魅力的であれば、難しいリズムの曲であっても最初に聞かせるときにひとつのフレーズのリズムやアクセントなどを明確に表現するなどの工夫によって、子どもはごく自然に本質をとらえてしまい、イメージをふくらませ気持ちよく歌ったり、聴いたりしてしまうことを示唆しているといえよう。

何の教材が、目の前にいる子どもにもっともふさわしいのかということを決めていくためには、子どもをよく観察することが大切である。他の実践でうまくいった例をそのまま持ち込んでも、目の前の子どもたちにとって、気持ちよくさせてくれる歌や新鮮で魅力のある歌であるとは限らないからである。

幼児保育の指導にかかわる指導者が歌や教材を決定するにあたって最も大切なのは、第1に自分がかかわっている子どもたちの実態を把握することであり、第2にその教材をどのようなイメージでとらえているのか、どの程度愛着を持っているのか、なぜ一緒に歌いたいと考えるかなどについて、保育者、指導者が真剣に向き合い理解しているかどうかということである。この理解度が、そのまま子どもに反映されることにつながっていくことになると思う。したがって指導者自身が、歌や音楽の教材について心から楽しむ気持ちを持ったり、惹き付けられたりしているということ、さらには子どもの身体、身の回りのもの、食べ物、季節の変化、行事など子どもの発達とともに広がる世界を、敏感に感じる心を持ち続けること、子どもが情景を想像したり、イメージを膨らませやすいような人間関係を日頃から築いていくことも必要であろう。安易にアニメ音楽やヒット曲に頼るのではなく、子どもに伝えていきたい歌や音楽という視点で適切な教材を考えていく必要がある。重要なのは、子どもにとっては、どんな音楽もすべてが新しい出会いということである。

ところで、指導者に求められる指導技術、指導方法については、①保育者の優しい歌声、②快い音楽を聞く機会の二点が大切といえよう。保育者はまず、優しく歌えるように自分の歌う技術を高めていくことが求められている。そのときに心がけるのは、子どもにとって聞き取りやすい声、日本語が鮮明でわかりやすい歌い方、一緒に歌いたくなるような歌い方など、子どもの視点にたった歌声を目指すことが大切である。快い音楽を聞くことについては、熊谷（1999）は、子どもにとってよい音楽とは、質のよい音楽であると同時に、子どもが喜んで聴く音楽であるとし、曲を選ぶポイントとして、①子どもが音楽を聴いて、イメージしやすいもの、②メロディーそのものが、リズムカルで躍動感があり、生き生きとして楽しいもの（例ヴィヴァルディ作曲「四季」から＜春＞）③乳児期には静かな落ち着いた感じの美しいメロディーのもの（例 バッハ作曲 管弦楽組曲第3番から＜アリア＞）などを上げている²¹⁾。

質のよい音楽をどう判断するかは、様々な考えから難しい問題であるが、発達段階に応じた楽器、楽器編成、音量を考慮すると柔らかい音色の楽器であり、大編成の抑揚の激しいオーケストラ曲よりは、美しいメロディーが特徴的な曲、リズムカルな曲などがふさわしいといえるであろう。

また、子どもに向いている音楽として使用されることの多い＜口笛吹と子犬＞＜森の鍛冶屋＞＜かっこうワルツ＞やモーツァルトの＜アイネ・クライネ・ナハトムジーク＞、ショパンの＜子犬のワルツ＞、チャイコフスキーの＜白鳥の湖＞J. シュトラウスの＜ラデツキー行進曲＞などを、例として上げながらも、選曲にあたっては保育者の価値観や児童観、音楽観がかかわってくることを、何よりも、保育者がその曲をほんとうに好きであるかどうか子どもに大きな影響を与えることも指摘している。そして、保育者や指導者が価値観や児童観、音楽観を養うためには、保育者や指導者自身が、日頃から質のよいすぐれた音

楽に親しみ、音楽性の向上に努めることが大切²²⁾と述べている。この指導者観は丸山(1987)が、保育者は自分自身が子どものように全身でいいものを吸収し、柔軟で鋭く、豊かになることが、子どもをしなやかに、鋭く、豊かに育てることに直接つながっている²³⁾と述べていることと一致するものであり、保育者自身が日常において、音楽に対しての感性を磨きながら指導にあたることの大切さを強調するものである。

すなわち、指導者になるにあたっては、歌やリズム表現や手遊びなどのスキルを身に付けることだけではなく、自分を深めたり成長させてくれるような音楽、芸術を求めること、驚いたり喜んだりする感情や感覚を大切にするために新しい体験や経験をすること、そして日常的なことばや動作までのすべてが、明快で、なおかつやさしく生き生きと、正しい方向性を持つように心がけることなども必要なことといえよう。なお、指導にあたって心がけることのなかでは、①そのときどき、いまいちばんいいと思うもの、子どもたちに必要だと思うものを、子どもの声や動きやさまざまの状態から判断し示していくこと。②子どもがよくなったときは、本気ではっきりそれをほめることなどが大事な要素になると考える。

5. おわりに

本論文では、子どもの発達に合わせた音楽指導や子どもの生活に結びついた適切な教材をどうとらえるかについて、『保育所保育指針』や音楽療法的視点などから若干の考察を行ってきた。音楽は明らかに、子どもの心と身体にその発達段階に応じて、それぞれの役割や働きをする。保育や幼児教育の音楽の指導において、動作の切り替えや集合の合図としての音楽の機能の活用も大切なことではあるが、音楽を歌ったり聞いたりして自分の気持ちを表現すること、何かを感じることができるよう導くことこそが重要な本質であり、その土台となるのは聞く力であることが明らかになったと考える。

また、保育や幼児教育にかかわろうとする者は、豊かな音楽観と価値観を備えるために、日頃から幅広い音楽とともに教養を身につけたり多様な経験を積んだりして、自分自身を深めることが望まれるということも再考されたと考える。

註

- 1) 小松明他『音楽療法最前線』人間と教育社、2000年、278ページ。
- 2) 小林登「胎児・新生児の Auditory Responses 音楽療法の原点として」『音楽療法の理解』日本パオミュージック学会、1998年、117ページ。
- 3) 志村洋子『乳児の音声における非言語情報に関する実験的研究』風間書房、2005年。
- 4) サリー・ウォード、汐見稔幸監修、槇朝子訳『「語りかけ」育児』小学館、2005年。
- 5) 同書、130-131ページ。
- 6) 同書、302-305ページ。
- 7) 旧約聖書「サムエル記Ⅰ16章23節」。
- 8) 金谷治『論語』岩波書店、2000年、351ページ。
- 9) 同書、134ページ。
- 10) ジョン・H・ミュラー、ネルソン・B・ヘンリー編—美田節子訳「音楽と教育」『音楽教育の基本的概念』音楽之友社、1986年、148ページ。
- 11) 村井靖児『ここに効く音楽』保険同人者、1998年、3-5ページ。

- 12) 厚生省児童家庭局 『保育所保育指針』, 1999年。
- 13) ドミトリ・カバレフスキー, 坪能由紀子訳『こどもの心をひらく』音楽之友社, 1989年, 42-43ページ。
- 14) かこさとし『日本の子どもの遊び下』青木書店, 1981年, 114ページ。
- 15) 園部三郎『幼児と音楽』中央公論社, 1977年, 13ページ。
- 16) A.P. メリアムー藤井友昭他訳『音楽人類学』, 1980年。
- 17) 丸山亜季『子どもと音楽を創る』一ツ橋書店, 1987年, 62-65ページ。
- 18) 同書, 15ページ。
- 19) 同書, 66ページ。
- 20) 同書, 67ページ。
- 21) 熊谷新次郎「子ども音楽の出会い」『音楽表現の理論と実際』音楽之友社, 1999年, 21ページ。
- 22) 同書, 29ページ。
- 23) 丸山亜季『子どもと音楽を創る』一ツ橋書店, 1987年, 69-70ページ。

The State of Music Instruction as Related to a Child's Development

Haruko Matsumoto

This paper considers how suitable teaching materials are connected with music instruction a child's development from the viewpoints of the "nursery school child care indicator" and a music therapy. As a result, the following two things became clear.

- 1) It is essentially important to lead according to a child's development, so that when singing or listening, something can be felt.
- 2) It is important that a childcare giver and those who are involved in early childhood education touch broad music and culture on daily basis, or gain various experiences, and polish a music view and a sense of values.